

(川内市国分寺町大都及び下台の一部)

位置と環境

薩摩国分寺跡は、川内市街地から北方約1.6km離れた通称国分寺台地と言われる洪積世台地の先端部に、川内川と水田地帯を眼下に東方には尼辰廃寺がある。台地の標高は10m前後あるため水害の恐れなく居住するのに最適な場所である。また、国分寺跡の西側には6町方域の国府跡が推定されている。

薩摩国分寺は、天平13年（741）聖武天皇により全60数カ国に建立させた寺であり、僧寺「金光明四天王護国之寺」である。尼寺「法華滅罪之寺」の位置は確認されていない。薩摩国分寺の創建は、奈良時代末期頃と推定され、区域内は南北130m、東西118mと推定されている。

調査の経緯

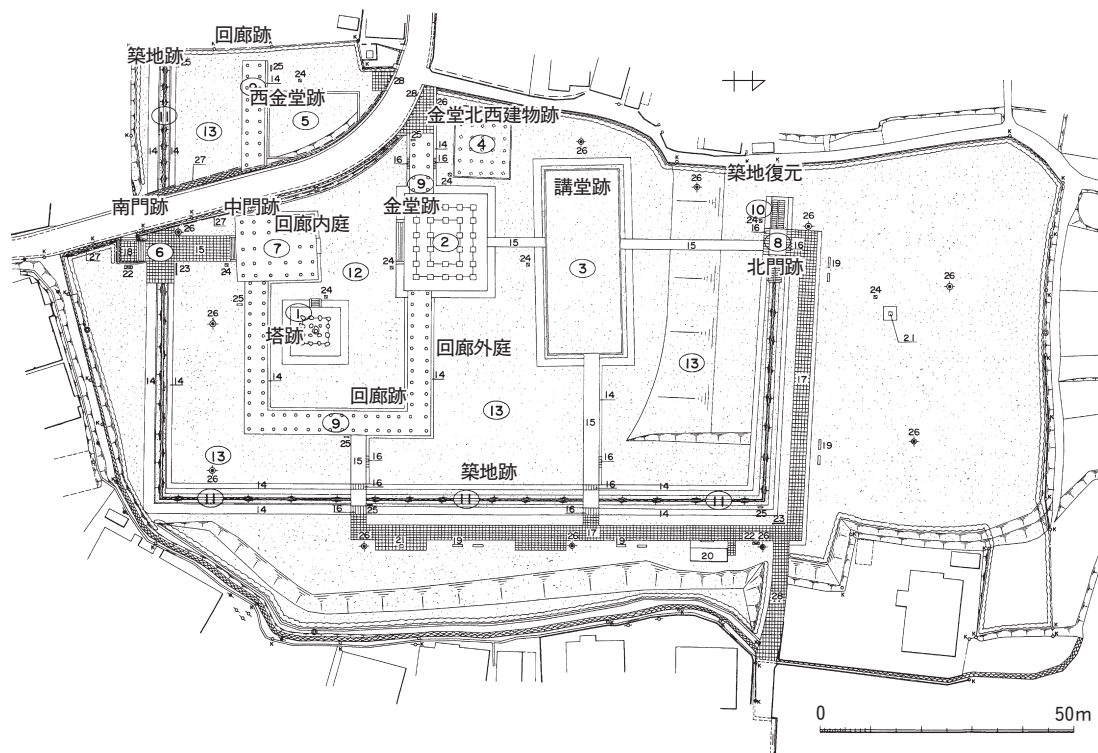
昭和19年に塔跡が国の史跡指定を受けている。昭和39年度から45年度にわたる県教育委員会と地元の川内高校の協力により、8次の発掘調査によって国府及び薩摩国分寺の位置もそれに東接することが明



第1図 薩摩国分寺跡の位置

らかになった。昭和41年の薩摩国府調査第3次調査では国薩摩国分寺跡より北東方約1kmの丘陵末端部崖面に露出した古代窯（鶴峯窯跡）3基が確認され、調査が実施されている。

薩摩国分寺跡は昭和43年～45年度にかけ県教育委員会が調査主体となり調査が行われた。その結果、国分寺としての伽藍配置が一部明らかになった。その後、宅地化する恐れがでてきたため、昭和51年について「史跡薩摩国分寺跡」として国の追加指定を受け、昭和51年度から52年度まで川内市は指定地内



第2図 薩摩国分寺跡環境整備平面図

の土地買上げを行なった。

昭和53年度、54年度、55年度には川内市教育委員会が調査主体となり環境整備事業に伴う調査が行なわれた。川内市は国と県の補助を得て、指定地内の環境整備事業を行なうため、昭和56年に史跡薩摩国分寺跡環境整備基本設計書を作成し、昭和57年度には追加指定と塔跡補足調査及び同58年には西金堂地区の確認調査を実施した。9か年に渡る発掘調査と整備事業により、昭和60年に国指定史跡薩摩国分寺史跡公園として整備した（第2図）。



写真1 国指定史跡 薩摩国分寺跡史跡公園

遺構と遺物

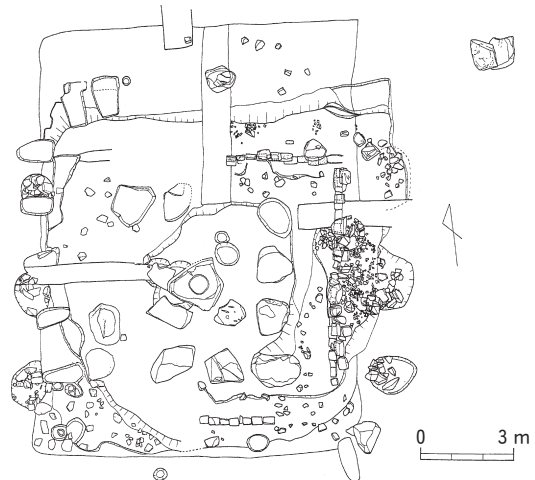
薩摩国分寺地域内では、全体的に礫の多い基盤層上を黄褐色ローム質土層が覆い、そのうえにいわゆるアカホヤ層が各所にあって、さらに最上に古代以来、移動・堆積した表土がある。表土中には多数遺物が残存し、遺構の一部は黄褐色ローム又はアカホヤ層上に位置する。国分寺遺構の乗る層より下に金堂東方などで轟式土器等からなる下層遺物層が残っていたが、全域にみられるわけではなく、国分寺創建時又はその以後の工事や土の移動によって失われなかった部分だけが残っており、中世以前の表土は削られて奈良時代の地表は塔と金堂のごく周囲と西金堂の西辺に局部的に確認されている。

南大門跡そのものは削られていたが、その礎石とみられるものが瓦とともに南の斜面下に廃棄されており、礎石をもつ瓦葺の門と考えられる。

塔跡は、昭和43年に塔基壇が調査され壇上には礎石と心礎を含めて13個残っていた。基壇には、版築

と切石積基壇が確認された。トレンチ断面でみると、少なくとも黒色土から掘り込んで、砂礫層にまで掘り下げている。この上に約150cmの厚さで凝灰岩角礫や小礫・砂の混在する層、黒褐色粘質土層、暗褐色粘質土層などの版築された層が23～25層ある。昭和57年度は、環境整備事業として塔跡復原と調査がなされ、南北13m東西10mの地下地業上の方8mの築成基壇があり、周囲に凝灰岩切石の基壇化粧を設ける。壇上の礎石は原位置から動いているものが多く、塔心礎は明治15年に市内の了忍寺に運ばれ、その後また旧位置に戻されている。

出土遺物には、鬼瓦Ⅰ式（第5図1）が創建期鬼瓦として鶴峯第2号窯跡出土の鬼瓦と同類ある。また、基壇の西北隅より直径約45cm、深さ約36cmの円



第3図 塔跡遺構

形ピットには、甕型土器が口縁部を上に向けて置かれており、掘り込み地業の鎮壇具として時期は奈良時代後半と思われる。

西金堂は、中軸線より約23m（78尺）西寄りに中心をおき、南北18.4m（62.2尺）東西13.4（45.3尺）の地下地業上に、大型の角礫を並べて地覆石とした瓦積基壇であり、上面は削られ根石位置は確認されていない。

講堂跡は、最下層の地業は東西46.5m、南北12.6mほどとみられ、地業は搗き固めが不十分で土が軟らかく、さらにこの上から掘り込んで固めた凝灰岩細片入りの地業があり、これは極めて固く北辺では瓦堆積を伴っていた。これが建物として完成した

第一期の講堂であると思われる。東西36.15m（122尺）、南北14.5m（49尺）ほどの大きさで、中軸線に対して著しく東へ寄っている。東西に細長いのは、講堂としては古式で、この点も川原寺に類似している。さらに、この基壇を削平して再建堂があり、北側は自然石の階段があるが、後世の攪乱のため正確な遺構が確認されなかった。講堂跡では、栗石積基壇及び礎石と思われる3個の巨石（安山岩）が出土し再建期鬼瓦（第5図2）が出土している。講堂東区の出土遺物は、瓦・土師器・内黒土師器・須恵器・陶器・磁気・土製品・石製品・鉄製品等が出土している。土師器には蓋・皿・坏…内黒土師器・高坏・鉢・甕などがある。鉄製品として角釘、風鐸の舌と思われる遺物が出土し、墨書土器や刻書土器も見られた。

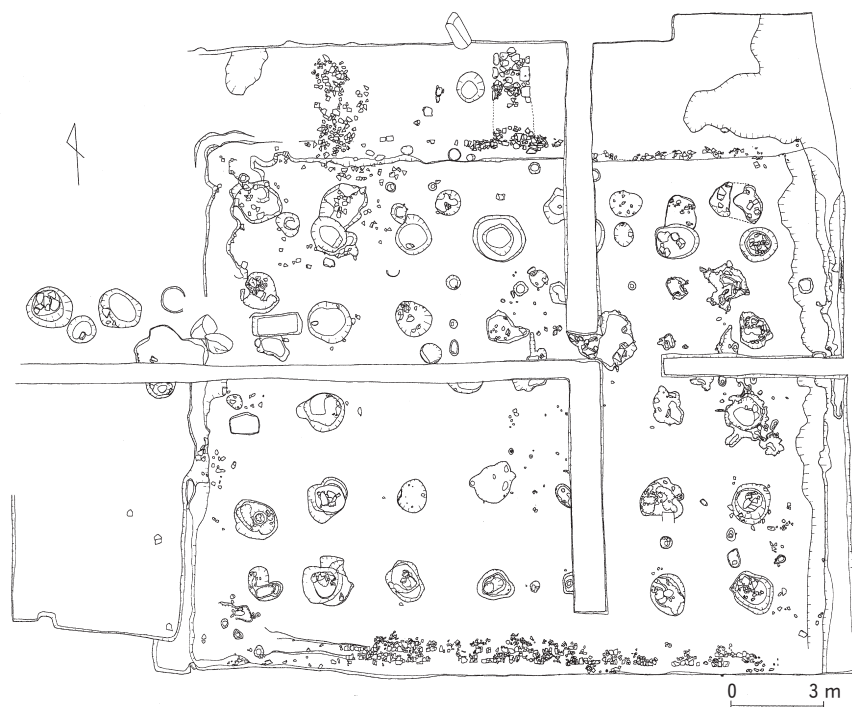
中門跡は、遺構検出面の土が過去に多量に除去されている。建物は、南北に柱間5間×4間の掘立柱建物跡で、四面に庇のある構造である。建物全体の規模は、南北に約1380cm、東西に約1080cmである。

金堂北西遺構は、南北の柱間4間、東西の柱間5間の東西棟である切妻構造の屋根と想定されている。金堂跡は、昭和43年にほぼ全面の調査が行なわれており3建時までの建物跡、瓦積基壇などが検出された。

創建金堂の基壇の規模は、東西10.1m、南北15.8mであり再建時にかなり削られ礎石も残っていなかったが、入母屋造りの屋根を持った5間×4間の建築跡が正確に検出されている。再建時基壇は、創建時の瓦を使った瓦積基壇である。その中に火を受けた痕跡があったので、創建金堂は火事で焼けたことが推定されている。3建時の遺構は残りが悪く、柱間の狭い掘立柱列と、礎石を用いない小さな建物であったことが確認されている（第4図）。

昭和41年には、鶴峯窯跡が寺跡の北方約1キロの川内市内鶴峯で発見された。この窯跡は、国分寺創建期の瓦当を含む古瓦の生産窯跡であることが調査により確認されている。1号窯の構造は、くり抜き式登窯でロストル式瓦窯の形態であり、焼成途中に天上の一部が陥没したことによって、瓦を窯詰した状態で発見されている。3号窯跡は、須恵器を生産したと考えられている。

薩摩国分寺瓦の軒丸瓦と軒平瓦は、国分寺創建期瓦（第5図3・5）、再建期瓦（第5図4・6）等があり、鶴峯2号窯跡内でも出土している。また、天辰廃寺でみられる軒丸瓦と軒平瓦もセットをなす同範品である。また、特殊瓦や丸瓦、平瓦、半瓦、面戸瓦がある。



第4図 金堂地区遺構

国分寺以前の遺物は、古墳時代・弥生時代・縄文時代の各時代のものが出土している。古墳時代・弥生時代の遺物は、甕・壺高坏が出土し、縄文時代の遺物は、轟式土器・曾畑式土器・塞ノ神式土器などの土器や、石鏃・石匙・石斧・磨石・凹石などの石器が出土している。

特徴

薩摩国分寺跡の建物基壇は、凝灰岩の栗石積みでありかなり丁寧に創られている。しかし、建物の規模は全国の国分寺の中でも小さく、中門、金堂、講堂を中軸線上におき、回廊内庭の東に塔、西に西金堂をおく配置と考えられ、これは大和川原寺の類型である。薩摩国分寺跡では川原寺式伽藍配置で完成

した珍しい例である。これまでの調査により平安時代と鎌倉時代に再建、3建されていることが確認されている。尚、国指定史跡薩摩国分寺跡には、鶴峯窯跡も含まれている。

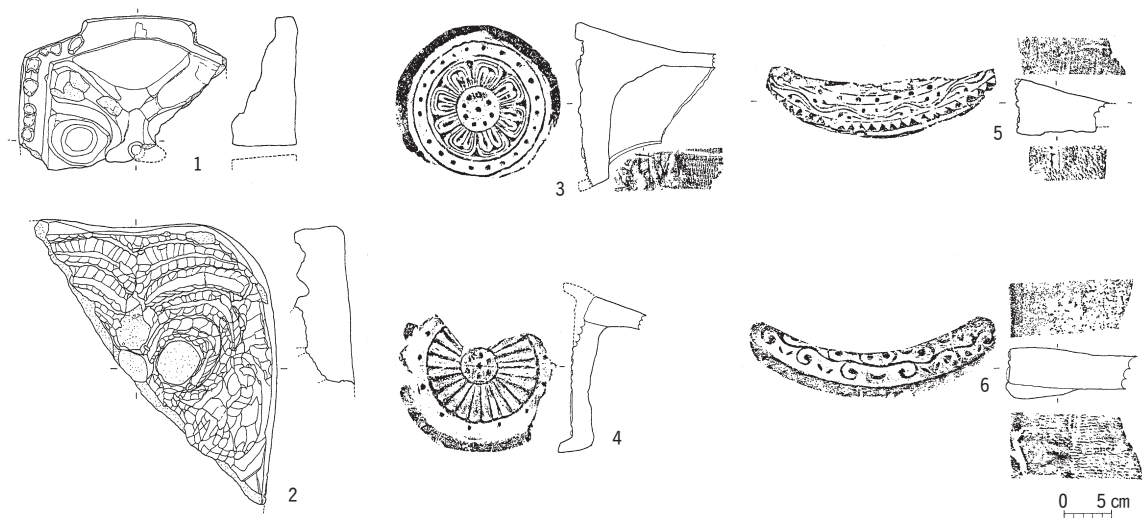
資料の所在

出土遺物は、鹿児島県教育委員会（昭和43～45年度）、川内市教育委員会（昭和53～59年度）に保管されている。

参考文献

鹿児島県教育委員会1975『薩摩国府跡・国分寺跡』
川内市教育委員会1985『国指定史跡薩摩国分寺跡環境整備事業報告書』

（小原 浩）



第5図 出土遺物